

# イスラーム情勢と日本の安全保障政策

東京新聞特別報道部 田原 牧

2014 年 6 月にいわゆるイスラーム国 (アラビア語の俗称で「ダーイシュ」、IS) がカリフ制国家の樹立を宣言し、その後、彼らや系列グループによる「テロ」や誘拐、虐殺事件が世界各地で続いています。一方、日本ではテロ対策が声高に叫ばれ、安保関連法の施行によって、自衛隊の海外での実戦が現実味を帯びてきました。その対象には IS やその系列組織も含まれていくでしょう。日本がこの「戦争」に巻き込まれる可能性は高まっています。そうした流れを何とか止めたいと考える人たちは少なくないと思います。そのためには、IS とはどんな集団であるのかを客観的に把握する必要があります。今日は IS とは何か、そして声高な「反テロキャンペーン」の陥穽 (かんせい) についてお話しします。

## イスラームについての基礎知識

IS はイスラームを掲げる集団です。その宗教解釈が異端かどうかは別にして、イスラームとは何かという知識を抜きにしては、彼らの考えを理解できません。このテーマはあまりに広く深いので、今日はいつまでも多少乱暴になると思いますが、その基本的な理解についてお話ししたいと思います。

イスラームというのはアラビア語で「アスラマ」という動詞から派生した名詞です。アスラマとは「唯一神であるアッラーフ (アラー=神) に自己を委ねる」という意味です。要するに神に帰依するということです。

イスラームの開祖はご存じのとおり、ムハンマドというアラブ人です。現在のサウジアラビアにいた商人で、彼の生まれた年ははっきりしないのですが、40 歳ぐらいのときに神の啓示を受けます。西暦で 610 年のことです。この頃、彼はメッカ (マッカ) 近郊の洞窟でしばしば瞑想をしていたそうです。ある日、瞑想中に大天使と出会い、神からの啓示を聞いたとされています。

彼にはお金持ちで年上の妻がいて、この不思議な体験を話すのですが、その結果、それは神様の啓示だから広めましょうという話に展開していきます。ちなみにムハンマドは預言者と言われますが、これは神の啓示を預かったという意味です。やがて彼の周りに親族をはじめ、多くの人が集まっていきます。ただ、当時は新興宗教ですから、元からある地場の多神教徒たちに迫害されます。その後、ムハンマドとその一党は 622 年、メッカを出てヤスリブ (後のマディーナ) というところに移住します。ここで彼らは教団国家をつくります。国家といっても共同体、コミュニケーション

なものです。

632 年にムハンマドさんが亡くなったため、教団の後継リーダーを信徒たちの中で選びました。この後継者を「カリフ」(預言者の代理人) と呼びます。4 代目のカリフまでは割と順調だったのですが、その 4 代目のアリーという人が暗殺され、その後継をめぐる争いが起きます。3 代目を輩出したウマイヤ家のムアーウィヤという人物が次のカリフを名乗り、これに賛同した人たちが「スンナ (スンニ) 派」をつくりました。これに対し、アリーの血統を重視し、ムアーウィヤの後継に反対した人たちが「シーア派」を形成します。ここで教団は分裂し、それが今日まで続いているわけです。

## イスラームは政教分離できない

さて、IS は宗教国家を目指していますが、そもそもイスラームに政教分離はあるのでしょうか。現実には、政教分離に近い統治をしている国はイスラーム圏には少なくありません。婚姻など民法レベルではイスラーム法 (複数のイスラームの聖典から抽出した法律) を適用しながらも、国の統治レベルでは欧米法を採用するといった具合です。

しかし、原理的にはイスラームに政教分離はありません。豚肉を食うとか、酒を飲むという戒律があることはご存知と思いますが、教義が個人的な行いの範囲にとどまっていれば、政教分離も可能なような気がします。しかし、イスラームは信仰の実践のために教団国家 (共同体) をどう運営していくのかということを含めて、教義 (と、それに則った法) が成り立っています。これは政治の領域です。

例えば、彼らは男女別学を唱えますが、それを実施するには教育行政がかかわってきます。ジハード (聖戦) への参加は信徒にとって義務ですが、聖戦はイスラーム共同体とその外の世界との間で摩擦が生じた際に発動されるので、外交問題ともいえます。それらの問題の処理の仕方もイスラーム法で定められています。完璧な信仰生活を送ろうとすれば、そうした政治的な領域を無視するわけにはいきません。

でも、これは驚くべきことではありません。むしろ、日本人がイメージするような政教分離は、世界ではまれなくらいです。日本人は米国を政教分離の国と考えがちですが、実際には宗教国家に近いと言えます。例えば、人工妊娠中絶や進化論はいまでも大きな政治問題です。大統領が宣誓するときにも、机に聖書が置いてあります。巨大な票田を持つ福音主義派などの宗教勢力を無視して、米国では大統領になれません。

### 「イスラーム過激派」は何を指すのか

正しい信仰生活の実践のためにはイスラーム法に貫かれた社会が不可欠で、それを現世で実現しようとするのがイスラーム主義という政治思想です。IS もそうしたイスラーム主義の組織です。ただ、その変革手段については、様々な意見があります。武闘をもってして、と考える人びとがいわゆるイスラーム過激派と括られます。

ここで誤解しやすいのは敬虔さとの混同です。1 日 5 回ちゃんとお祈りして、断食月にはきちんと断食を守るような敬虔なムスリム（イスラーム信徒）はたくさんいますが、彼らがイスラーム主義者だとは限りません。敬虔でも政治変革には無関心という人は少なくないからです。もちろん、イスラーム主義者からみれば、社会を変えようともしない敬虔さなど欺瞞にすぎないという批判はあると思います。

研究者たちは IS を含むスンナ派のイスラーム過激派を「サラフィー・ジハーディスト」と区分しています。ジハーディストは武闘も辞さない人びとと解釈して下さい。大切なのはサラフィーです。これは「サラフィーヤ」という考えを信奉する人びとを指します。この言葉が大切なのは、彼らが既成の宗教権威に対して攻撃的であること、そして反植民地主義の指向が強いことと関連があるからです。

サラフィーはキリスト教のプロテスタントと相似的です。彼らはイスラームのお坊さん（イスラーム法学者）たちが積み上げてきた宗教解釈だとか、あるいは権威というものを否定します。というのも、お坊さんの集団が歴史的に自己防衛のために、ときの非イスラーム的な権力と妥協して本来の宗教精神を逸脱（ビドア）、墮落させてきたと考えるためです。既成の教会権力を批判して登場したプロテスタンティズムとその点が似ています。

サラフというのは預言者ムハンマドの教友（サハーバ）、あるいはイスラーム共同体の成立期を支えた人々を指す言葉ですが、サラフィーの人たちはそうした初期イスラームの純粋さに憧憬を抱き、そうした精神や信仰生活、社会を復元したいと考えます。

こうした考えを広め、現代のイスラーム復興運動の祖となった人に 19 世紀に活躍したジャマールッディーン・アフガーニーという人がいます。彼は若い頃、インドに留学するのですが、当時、インドは英国の植民地主義によって惨憺たることになっていて、彼はその現実を目の当たりにして悩みます。

アフガーニーは単に西欧の植民地主義を批判するのではなく、イスラーム圏の墮落がこうした被支配を招いたという自己批判的な結論にたどりつきます。教義が悪いという意味ではなく、イスラーム圏の為政者や宗教権威が教義を腐敗させ、かつ一般の信徒たちも墮落して団結も連帯もしていないことの帰結として、この体たらくがあると考えたのです。ですから、その克服には原初のイスラーム精神の回復が必要となるわけです。

この反植民地主義、そして既成宗教権力への批判と

いう性向は、イスラエル建国、アフガン戦争、イラク戦争、古くは第 1 次大戦後のアラブの分割（サイクス・ピコ体制）などにも重なっていきます。IS などイスラーム過激派への一定の民衆のシンパシーには、こうしたアフガーニー的な発想への共感が背景にあるのです。

だからといって IS たちが民衆から歓迎されているわけではありません。むしろ、嫌われているといつてよい。その理由の一つに、IS など一部の過激派による「タクフィール」の濫用があります。タクフィールというのは、特定のムスリム（イスラーム教徒）を背教徒と認定することです。ちなみにイスラーム法では背教は死罪に値します。

この思想は劇薬です。エジプトのサッダート大統領はイスラーム過激派に殺されましたが、これは彼がイスラエルと和平を結んだことで過激派に背教徒と認定されたからです。この殺害には当時、エジプト民衆も暗黙の了解を与えましたが、タクフィールが為政者ではなく、民衆に向けられるとなると話は別です。われわれに従わないからオマエは背教徒だ、ゆえに処刑するとなれば、それはポルポト政権ばりの恐怖政治になります。民衆にしてみれば、たまったものじゃないのですが、IS はこれを実践しています。

### 「ダーイシュ」（イスラーム国）とは何者か

IS の本拠地はイラクですが、なぜ彼らはここまで勢力を広げられたのか。これにはイラク特有の事情があります。よく IS はイラク戦争の産物だと言われますが、IS の前身はイラク戦争前から存在していました。そして、イラク戦争自体よりも、その後の米国の暫定統治やシーア派主導政権の誤った政策が、彼らの伸張を促しました。

イラク戦争はサッダーム・フセインの独裁体制を倒しました。サッダームはスンナ派の人ですが、世俗主義者で彼の統治下でイスラーム主義者は徹底弾圧されていました。そうした圧政がなくなって、イスラーム主義者は表に出てこられるようになりました。

しかし、それだけでは IS は育ちません。戦後、米国の暫定統治は旧政権の軍人やサッダームが率いた政権党のバース党員をパージします。そして人口では多数派ながら、サッダーム政権下では憂き目を見ていたシーア派が権力を握ると、スンナ派に対する意趣返しが始まりました。このころ、IS の前身組織がシーア派に対するテロを拡大します。有名なシーア派寺院が次々と爆破されたりしました。

困った米国と当時の政権は過激派が根城とするスンナ派地域の部族長らに協力を求め、民兵を組織させ、過激派の鎮圧に動員します。この作戦は功を奏したのですが、シーア派主導政権は彼らに「報酬」を与えるどころか、政権からスンナ派の有力政治家たちを追放したり、まるで恩を仇で返すような行動を取りました。

当然、スンナ派の憤りは膨らみます。そのころ、水面下で旧バース党政権の一部が IS の前身組織と手を握ります。後に IS が独自の通貨やパスポートを発行し、原油密輸で豊富な資金を手にしたことに世界は驚きま

したが、旧政権の人材がいる以上、そう難しいことではなかったわけです。ISはスンナ派住民の怒りを背景に、スンナ派地域で蜂起し、国家樹立を宣言するのですが、これは一種のクーデターとみてよいと思います。

加えてアラブ各地で当時、イスラーム主義者たちの攻勢が強まっていたのですが、これには「アラブの春」の影響があります。「アラブの春」が倒した独裁者たちはいずれも世俗主義者であり、従来、イスラーム主義者たちを徹底弾圧してきました。そうしたフタが外れた結果、パンドラの箱から過激派たちが飛び出していったのは必然だったと言えます。

### 「ダーイシュ」の現代性

これまでISをはじめとするイスラーム過激派の思想、そしてIS台頭の政治的事情について話してきましたが、ISには旧来のイスラーム過激派とは異なる現代的な性格があります。それはイスラームの枠を越え、日本のヘイト団体にも通じるものです。

ひとつの側面はISへの欧州を中心にした義勇兵というか、志願兵たちに特徴的です。キーワードは「生き直し」です。義勇兵にはイスラーム圏からの移民の2世、3世が多いのですが、彼らは日常的に(植民地主義的な)差別構造と疎外感に苛まれています。新自由主義の嵐の中で、一度でもつまらないことで犯歴がつけば、折からの二級市民という階層もあって、なかなか正業に就くのが難しいというような環境に生きています。

ISはそこに欧米社会への怨嗟、そしてISの一員になることによる「生き直し」の希望を吹き込みます。自己評価の低い彼らに「本当のオマエはもっとすばらしい存在だ」と誘うのです。さらにそのコミュニティは表向き、仲間にとっても温かい。彼らの勧誘ビデオを見ると、そこには同胞への愛にあふれた「もう一つの世界」が広がっています。

彼らの残忍さはカルト的な宗教解釈に裏打ちされていますが、そこには旧世界の常識だとか、西欧の人権思想と訣別する儀式的な意味も込められているように見えます。常識的な後ろめたさを西欧文化の残滓(ざんし)と決めつけ、敵視することがエネルギーとなるわけです。

問題はそうした宗教解釈を相対化し、検証する意思や知識が義勇兵にないことです。教義のドグマをそのまま、現実にコピペしようとする。これはネット上の歴史修正主義的な珍論を鵜呑みにし、ヘイト団体で初めて仲間扱いされて感激し、犯罪的とも言える差別的言辭をぶちまけることで「生き直し」を図ろうとするヘイトの若者たちとよく似ています。

イラクは多宗教国家です。それぞれのコミュニティが争い、血を流し、その末に互いに妥協して暮らしてきたという歴史の積み重ねがあります。それが現実というものなのですが、ネット世代のコピペ発想にはそうしたリアル感を壊します。つまり、歴史を踏まえた身体性がない。身体性とは痛みに対する想像力であり、共感する能力です。だから、残忍になれる。こうした病理はISのみならず、世界共通の現象だと思っています。

### 自衛隊の展開と外交姿勢

最後に日本の話です。結論から言って、私はテロの根絶はできないと思っています。実際に9.11から15年も経って、この状況です。ただ、根絶はできなくても、リスクの低減はできると思います。そのためには恨みを買わないことです。日本はイスラーム圏とは侵略、被侵略の歴史はなく、むしろ友好的な関係を続けてきました。これだけで欧米に比べれば、大きなアドバンテージなのです。自ら捨てるのは愚かすぎます。

しかし、その愚しさがここ十数年の間に募ってきて、ついに駆け付け警護を可能とする安保関連法(改正PKO法)が施行されました。それを実践する最初の戦場はアフリカになるとみられます。南スーダンのPKOです。すでに近隣のジブチには海賊対策名目で設けた自衛隊の拠点があり、600人ほどの自衛隊員が常駐しています。どういうことか。米国はもはや独力で覇権を維持できません。アフリカについては、歴史的に植民地政策を採ってきたフランスと、海外派兵に野心のある日本に任務分担をさせようとしています。

アフリカにもISに忠誠を誓うイスラーム過激派たちがいます。リビアにはISそのものがありますが、西アフリカには「ボコハラム」、東アフリカのソマリアには「シャバーブ」がいます。日本は東アフリカでのテロ対策を任せられようとしています。

注意したいのは国際協調という言葉です。これが派兵の支えになるのですが、この言葉の実態は各国の利害の一致です。つまり自国の利益に反するなら、背を向けるのが世界の常識です。日本人はそこに疎くて、美辞麗句に安易に騙されがちです。わざわざ、火中に手を突っ込む必要はないのです。

もうひとつ、安倍政権は一気にイスラエルとの関係を緊密化させています。これもイスラーム過激派が攻撃する口実になるでしょう。米国ですら、いまやイスラエルとは距離を置いている時代です。にもかかわらず、東京五輪の治安対策はイスラエルのセキュリティ企業に任せましょうみたいな話になっています。まさに自爆的な行為です。

日本がなすべきことは仲介外交です。折角、歴史的にイスラーム圏と対話できる位置にあるのです。それを生かささない手はありません。例えば、イランと米国は最近、関係を改善していますが、それ以前には絶縁状態で、日本に期待されていたことは両者の仲介役でした。こうした芸当が日本にはできるのです。それは安全保障に直結します。

最後に、IS現象について、私たちの責務みたいなことを付け加えたいと思います。彼らは差別や戦争の被害者という立場にある一方で、地域の少数者集団に対しては抑圧者として振る舞っています。被抑圧者はしばしば抑圧者に転成します。転成させない別の道を提示できていないことは、左派・リベラルの低迷に大きな原因があると考えています。これは国内のヘイト団体に加わる若者の問題でも言えることです。共生に向けた道を提示できるだけの思想と力量の蓄積が、私たちに課せられていると痛感しています。

(たはら まき)